# 臨床看護学・助産学専攻科

## １　構　成　員

| | 平成 27 年 3 月 31 日現在 |
|---|---|
| 教授 | 3 人 |
| 病院教授 | 0 人 |
| 准教授 | 2 人 |
| 病院准教授 | 0 人 |
| 講師（うち病院籍） | 2 人　（0 人） |
| 病院講師 | 0 人 |
| 助教（うち病院籍） | 7 人　（0 人） |
| 診療助教 | 0 人 |
| 特任教員（特任教授、特任准教授、特任助教を含む） | 1 人 |
| 医員 | 0 人 |
| 研修医 | 0 人 |
| 特任研究員 | 0 人 |
| 大学院学生（うち他講座から） | 0 人　（0 人） |
| 研究生 | 0 人 |
| 外国人客員研究員 | 0 人 |
| 技術職員（教務職員を含む） | 3 人 |
| その他（技術補佐員等） | 0 人 |
| 合計 | 18 人 |

## ２　教員の異動状況

森　恵子（教授）（H25.4.1～現職）

佐藤　直美（教授）（H9.8.1～H18.3.31 助手；H18.4.1～講師；H23.10.1～准教授；H25.4.1～現職）

安田　孝子（教授）（H16.4.1～H26.3.31 講師；H26.4.1～現職）

千々岩　友子（准教授）（H25.4.1～現職）

武田 江里子（准教授）（H21.4.1～H25.9.30 講師；H25.10.1～現職）

宮城島 恭子（講師）（H14.1.1～H17.3.31 助手；H17.4.1～現職）

倉田　貞美（講師）（H18.6.1～現職）

杉山　琴美（助教）（H16.4.1～19.3.31 助手；H19.4.1～現職）

足立　智美（助教）（H16.4.1～H19.3.31 助手；H19.4.1～現職）

牧野　公美子（助教）（H18.4.1～H19.3.31 助手；H19.4.1～現職）

坪見　利香（助教）（H19.4.1～現職）

河島　光代（助教）（H21.11.1～現職）

田坂　満恵（助教）（H22.4.1～現職）

都築　弘典（助教）（H25.4.1～H26.11.30）

木村　幸恵（特任助教）（H25.4.1～現職）

佐藤　裕紀（教務補佐員）（H24.4.1～現職、H25.10.15～H26.9.30 産休・育休）

白柳　聡美（教務補佐員）（H26.4.1～現職）

野澤　園子（教務補佐員）（H25.11.1～H26.9.30、H26.12.1～H27.3.31）

## ３　研究業績

数字は小数２位まで。

| | 平成 26 年度 | |
|---|---|---|
| （1）原著論文数（うち邦文のもの） | 9 編 | （6 編） |
| そのインパクトファクターの合計 | 3.36 | |
| （2）論文形式のプロシーディングズ及びレター | 2 編 | |
| そのインパクトファクターの合計 | 0.00 | |
| （3）総説数（うち邦文のもの） | 1 編 | （1 編） |
| そのインパクトファクターの合計 | 0.00 | |
| （4）著書数（うち邦文のもの） | 2 編 | （2 編） |
| （5）症例報告数（うち邦文のもの） | 0 編 | （0 編） |
| そのインパクトファクターの合計 | 0.00 | |

### （1）原著論文（当該教室所属の者に下線）

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 武田江里子、佐原直美、小林康江： 1 歳 6 ヵ月児をもつ母親の育児の楽しさに関連する要因健診時の問診票と「愛着-養育バランス」尺度から、保健師ジャーナル、70 (7)、592-600、2014.
2. 武田江里子 :「愛着-養育バランス」尺度短縮版の作成と信頼性・妥当性の検討　乳幼児健診での<気になる>母親との関連から、小児保健研究、73（6）、783-789、2014.
3. 武田江里子、小林康江、弓削美鈴 : 産後 1 年までの母親の「愛着-養育バランス」の特徴、母性衛生、55（4）、689-699、2015.
4. 武田江里子、弓削美鈴、小林康江 : 知っておくことで育児のしやすさにつながる産後 1 か月時の母親の気持ち―ブループインタビューによる母親の気持ちの抽出―、日本母性看護学会誌、15（1）、18-25、2015.
5. Tsubomi R : What children with developmental disabilities are troubled about in outpatient examinations: Based on the research with the parents, The Asian Journal of Disable Sociology, 14, 15-24, 2014.
6. 坪見利香 : 発達障害に関する外来看護師の対応の困難さとコミュニケーション力, 障害理解研究(15), 21－28, 2014.
7. 千々岩友子、石村佳代子 : 精神科デイケア導入期における看護師のケア内容に関する研究、日本デイケア学会誌、18(2)、3-11、2014.

インパクトファクターの小計　［0.00］

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

1. Nishizawa D, Fukuda K, Kasai S, Ogai Y, Hasegawa J, Sato N, Yamada H, Tanioka F, Sugimura H, Hayashida M, and Ikeda K: Association Between KCNJ6 (GIRK2) Gene Polymorphism rs2835859 and Post-operative Analgesia, Pain Sensitivity, and Nicotine Dependence. J Pharmacol Sci 126, 253-263, 2014, ［2.11］

2. Sato T, Sato N, Masui K, Hirano Y. Immediate effects of manual traction on radiographically determined joint space width in the hip joint. J Manipulative Physiol Ther. 37, 580-585, 2014, ［1.25］

インパクトファクターの小計　　［3.36］

## （２－１）論文形式のプロシーディングズ

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 坪見利香, 徳田克己: 発達障害に関わる外来看護師が求める研修, The 6th Asian Society of Child Care, 33-36, 2014.
2. 千々岩友子: 看護における臨地実習の意味、看護実践の科学、39（13）、60-64、2014.

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

## （２－２）レター

## （３）総　　説

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

1. 大見サキエ，宮城島恭子：化学療法を受ける患者の社会復帰と関連領域との連携，小児看護，37（13），1703-1708, へるす出版，2014 年 12 月号

## （４）著　　書

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 倉田貞美、尾島俊之：高齢者社会福祉、一般社会法人日本家族計画協会公衆衛生委員会、保健指導ノート 2015 公衆衛生の現状、一般社会法人日本家族計画協会、東京都、10･5-10･12、2014

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

1. 大見サキエ，森口清美，谷口惠美子，畑中めぐみ，宮城島恭子，平賀健太郎，河合洋子，高橋由美子，金城やす子，堀部敬三作、森邦生絵：めいちゃん！おかえり　白血病と闘った子どもが学校に戻る，ふくろう出版，岡山市，2015 年 3 月.

## （５）症例報告

## ４　特許等の出願状況

| | 平成 26 年度 |
|---|---|
| 特許取得数（出願中含む） | 0 件 |

## ５　医学研究費取得状況

（万円未満四捨五入）

| | 平成 26 年度 | |
|---|---|---|
| （１）文部科学省科学研究費 | 12 件 | （974 万円） |
| （２）厚生労働科学研究費 | 0 件 | （0 万円） |
| （３）他政府機関による研究助成 | 0 件 | （0 万円） |
| （４）財団助成金 | 1 件 | （10 万円） |
| （５）受託研究または共同研究 | 2 件 | （120 万円） |
| （６）奨学寄附金その他（民間より） | 0 件 | （0 万円） |

（１）文部科学省科学研究費

1. 武田江里子（代表者）基盤研究（C）　母親の養育者としての発達を促す支援―育児不安に対する SAT 法による予防的介入、150 万円（新規）
2. 宮城島恭子（代表者）若手研究（B）　小児がん患者の周囲の人との疾患に関するコミュニケーションを支えるための基礎的研究、55 万円（継続）
3. 坪見利香（代表者）基盤研究（C）　自閉症スペクトラム障害をもつ子どもと家族への看護実践力向上を目指した基礎的研究、84 万円（継続)
4. 木村幸恵（分担者）基盤研究（C）　母親の養育者としての発達を促す支援―育児不安に対するSAT法による予防的介入、20万円（新規）代表者　武田江里子（助産学専攻科）
5. 森恵子（代表者）基盤研究（C）　集学的治療を受ける食道がん患者の「回復の実感」獲得を促進する看護実践モデルの構築，210万円（新規）
6. 佐藤直美（代表者）基盤研究（C）慢性腰痛患者の痛みに対する認識・態度を測定する国際的尺度の開発、平成26年度～29年度、180万円（新規）
7. 牧野公美子（代表者）基盤研究C・特設分野研究（ネオ・ジェロントロジー）　終末期認知症高齢者の代理決定における家族と看護師の対立と一致，75万円（新規）
8. 白柳聡美（分担者）基盤研究C・特設分野研究（ネオ・ジェロントロジー）　終末期認知症高齢者の代理決定における家族と看護師の対立と一致，5万円（新規）
9. 安田孝子（代表者）、尾島俊之　挑戦的萌芽研究　母親の清潔なおしゃれ意識とチャイルド・マルトリートメントの予防に関する新機軸研究　60万円（継続）
10. 足立智美（代表者）若手研究（B）子宮頚部異形成患者の看護実践モデルの構築に向けて　70万円（継続）
11. 杉山琴美（代表者）若手研究（B）多胎妊娠を告げられた女性の看護実践モデルの構築，0円（継続）
12. 千々岩友子（代表者）若手研究(B)、精神科デイケア導入期における看護支援を包含した早期リハビリテーションの評価、平成26年度～平成29年度、65万円

（２）厚生労働科学研究費

（３）他政府機関による研究助成

（４）財団助成金

1. 森恵子（代表者）H26 年度プロジェクト研究（看護学科対象）　がん化学療法に伴う脱毛体験が成人男性患者の日常生活に及ぼす影響，10 万円（新規）

（５）受託研究または共同研究

1. 武田江里子（代表者）日本母性看護学会研究助成　子育てをしやすくする産後 1 か月健診時のパンフレットの試作、20 万円（新規）
2. 田坂満恵（代表者）ソフトプレン工業株式会社　乳児における斜頭症・絶壁頭の防止用具の研究開発、100 万円（継続）

## ６　新学術研究などの大型プロジェクトの代表，総括

## ７　学会活動

| | 国際学会 | 国内学会 |
|---|---|---|
| （１）特別講演・招待講演回数 | 0 件 | 0 件 |
| （２）シンポジウム発表数 | 2 件 | 0 件 |
| （３）学会座長回数 | 0 件 | 8 件 |
| （４）学会開催回数 | 0 件 | 0 件 |
| （５）学会役員等回数 | 0 件 | 2 件 |
| （６）一般演題発表数 | 3 件 | |

（１）国際学会等開催・参加

1）国際学会・会議等の開催

2）国際学会・会議等における基調講演・招待講演

3）国際学会・会議等でのシンポジウム発表

1. Kurata S, Ojima T: Use of Physical Restraints by Family Caregiver with Home-dwelling Elders: Perceptions of Family Caregivers and Home Care Providers, The 14th Kyungpook-Hamamatsu Joint Medical Symposium Hamamatsu Meeting, 25 September 2014, Hamamatsu, Japan.

2. Yasuda T: Postpartum smoking relapse among women who quit during pregnancy: Cross-sectional study in Japan. The 14th Kyungpook-Hamamatsu Joint Medical Symposium Hamamatsu Meeting, 25 September 2014, Hamamatsu, Japan.

4）国際学会・会議等での座長

5）一般発表

口頭発表

1. Tsubomi R : What Children with Developmental Disabilities are Troubled about in Outpatient Examinations: Based on the Research with the Parents, The 14th Asian Society of Disable Sociology、2014 年 9 月、台北市（台湾）

2. 坪見利香, 徳田克己: 発達障害に関わる外来看護師が求める研修, The 6th Asian Society of Child Care、2014 年 9 月、台北市(台湾)

ポスター発表

1. Takeda E, Kobayashi Y, Yuge M：Stress and Stress Management that Impact the Development of the Caregiving System in Mothers at 1-month Postpartum、ICM 30th Triennial Congress International Confederation of Midwives、2014.6、Czech Republic.

（２）国内学会の開催・参加

1）主催した学会名

2）学会における特別講演・招待講演

森恵子、第 8 回浜松がんフォーラム 21　教育講演「がんリハビリテーションの視点から、がんサバイバーへの支援を考える～回復期に焦点を当てて～」

3）シンポジウム発表

4）座長をした学会名

森恵子、第 29 回日本がん看護学会学術集会、第 19 回日本看護研究学会東海地方会学術集会

倉田貞美、第 19 回日本看護研究学会東海地方会学術集会

安田孝子、第 19 回日本看護研究学会東海地方会学術集会

千々岩友子、第 19 回日本看護研究学会東海地方会学術集会

佐藤直美、第 34 回日本看護科学学会学術集会、第 19 回日本看護研究学会東海地方会学術集会

杉山琴美、第 19 回日本看護研究学会東海地方会学術集会

武田江里子、第 34 回日本看護科学学会学術集会、第 19 回日本看護研究学会東海地方会学術集会

（３）役職についている国際・国内学会名とその役割

森恵子、日本がん看護学会編集委員

安田孝子、静岡県母性衛生学会　理事

## ８　学術雑誌の編集への貢献

| | 国　内 | 外　国 |
|---|---|---|
| 学術雑誌編集数（レフリー数は除く） | 0 件 | 0 件 |

## ９　共同研究の実施状況

| | 平成 26 年度 |
|---|---|
| （１）国際共同研究 | 0 件 |
| （２）国内共同研究 | 5 件 |
| （３）学内共同研究 | 0 件 |

（１）国際共同研究

（２）国内共同研究

1. 大見サキエ，高橋由美子（岐阜聖徳学園大学），河合洋子（宝塚大学），森口清美（川崎医療福

祉大学)，宮城島恭子，畑中めぐみ（中部大学)，堀部敬三（名古屋医療センター)，平賀健太郎（大阪教育大学)，金城やす子（名桜大学)：がんの子どもの復学支援プログラム構築のための基礎的研究

2. 牧野公美子，白柳聡美，杉澤秀博（桜美林大学)：認知症高齢者の終末期医療を代理決定する家族への看護支援
3. 山本真矢，鈴木千佳代，宗像倫子，中村麻友美，近藤理子，太田美貴（聖隷浜松病院スペシャリストチーム)，倉田貞美，牧野公美子，白柳聡美：急性期病院における身体拘束実施時の看護師の判断に影響する因子、①高度急性期病院における身体拘束実施の実態調査，②高度急性期病院における身体拘束に関する看護師の認識について
4. 三枝智宏，大國護洋子（浜松市国民健康保険佐久間病院），倉田貞美：急性期病院に勤務していた看護師がへき地病院に転任し戸惑いながら地域の看護師としての仕事を理解し獲得していくプロセス
5. 佐藤直美, 椙村春彦（腫瘍病理学)，谷岡書彦（磐田市立総合病院検査科)，池田和隆（東京都医学総合研究所）　喫煙行動と遺伝子多型の関連

（３）学内共同研究

## 10　産学共同研究

| | 平成 26 年度 |
|---|---|
| 産学共同研究 | 1 件 |

1. 田坂満恵（代表者）乳児における斜頭症・絶壁頭の防止用具の研究開発
   ソフトプレン工業株式会社
   （久保田君枝、足立智美、木村幸恵、兒島恵子）

## 11　受　　賞

## 12　研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 母親の養育者としての発達を促す支援―育児不安に対する SAT 法による予防的介入

育児不安に対する予防的介入および養育者としての発達を促す支援として SAT 法の効果を検証し、具体的活用方法を構築することを目的としている。SAT 法は人の内的要因の一つして気質に着目していることから、気質と養育者としての発達および関連要因を明らかにするための調査を実施し、現在分析中である。同時に SAT 法に関する理解を深め、近隣の支援者たちへの周知のために SAT 法開発者の宗像氏の講演会を開催し、研修会への参加を促した。(武田江里子、小林康江、木村幸恵)

2. 子育てをしやすくする産後 1 か月健診時のパンフレットの試作

子育て支援として、母親の内的要因への働きかけに着目し、産後 1 か月時の母親の気持ちをグループインタビューから抽出し整理したものをパンフレットとして試作することを目的とした。抽出した気持ちの内容妥当性を支援者への調査にて確認しリーフレットを試作した。そのリーフレット

への意見や感想を子育て中の母親に調査し、現在分析中である。気持ちの内容妥当性までの調査結果は論文にて公表した。今後は、母親の調査結果をもとにリーフレットを修正していく予定である。（武田江里子、弓削美鈴、小林康江）

3. 小児がん患者の周囲の人との疾患に関するコミュニケーションを支えるための基礎的研究

小児期にがんを発症した20～30歳代の人に面接調査を行い、『病気をもつ自分と向き合うプロセス』と『周囲の人への病気説明の見極めに関する経験』を明らかにし、一部成果発表を行い、投稿準備を行った。（宮城島恭子，大見サキエ，高橋由美子）

4. 自閉症スペクトラム障害をもつ子どもと家族への看護実践力向上を目指した基礎的研究

自閉症スペクトラム障害をはじめとする発達障害と診断されている子どもの看護実践力向上のためのプログラムの開発が目的である。発達障害と診断された子どもの保護者に受診時の看護支援ニーズについて調査を実施した。子どもが受診する機会が多いクリニックの看護師を対象に研修に対するニーズ調査を実施した。今後、研修プログラムを開発・実施することでプログラムの効果や課題を明らかにする予定である。(坪見利香)

5. 変形性斜頭症・絶壁頭の予防マットの研究開発

本研究は、企業との共同研究により児頭の変形を予防するための寝具を開発し、その効果と安全性を検証することを目的としている。第一次調査において開発品（試作品マット）の体圧分散効果・減圧効果と安全性を検証した。今回、第二次調査として乳児期の児頭の変化を縦断的（生後10日以内・1か月後・3か月後・6か月後）に調査し、開発品と従来品での斜頭症や絶壁頭等の頭部の変形の有無・程度を比較する。H26年度は研究協力者のリクルートは101例で、家庭訪問による児頭の写真撮影と測定を継続中である。今後は、調査を進め、開発品の変形性斜頭症・絶壁頭の予防効果を検証する。(田坂満恵　足立智美　木村幸恵　久保田君枝　兒島佳子)

6. 母親が期待する子育て支援とそれに関する要因―子育て支援の外的要因と母親の気質と養育者としての発達との関連―

本研究は、育児不安を軽減させるため現在様々な子育て支援の形態がある中で、母親が期待する子育て支援の内容やこれまで利用して良かったことなど外的要因と母親の気質など内的要因と養育者としての発達との関係性を調査し、母親自身の性格の傾向に沿った子育て支援に活用することを目的としている。1か月児・1歳6か月児健診と6か月児健康相談を受ける母親1500名に自記式無記名調査票を配布し、回収箱・郵送にて回収した。現在は回収した調査票のデータ入力とデータ分析作業中である。（木村幸恵、武田江里子）

7. 集学的治療を受ける食道がん患者の「回復の実感」獲得を促進する看護実践モデルの構築

食道がんのために食道切除術を受け、その回復過程において補助療法として化学療法、放射線治療を受ける患者の「回復の実感」を明らかにする目的で、「回復の実感」について概念分析を開始した。時代による用語の活用・重要性の変化を捉えて、概念分析を行うRodger's の概念分析の

アプローチ法を用いて、概念分析を実施中である。文献検索は和文献のみとし、文献検索データベースは医学中央雑誌 web 版 ver.5 および CiNii を使用。検索対象期間 2005～2014 年とし、現在分析の途中である。（森恵子）

8. がん化学療法に伴う脱毛体験が成人男性患者の日常生活に及ぼす影響

がん化学療法に伴う脱毛体験が成人男性患者の日常生活に及ぼす影響明らかにするために、浜松医科大学医学部附属病院外来化学療法において外来化学療法を継続中の患者 2 名にインタビューを実施した。今後インタビューを継続予定である。（森恵子）

9. 日本における高齢者の終末期医療に関する代理決定の研究動向と今後の課題（文献研究）

医学中央雑誌 web 版を用いた検索では、キーワードを「意思決定」「家族」「終末期」「高齢者」とした結果 144 編、「代理決定」「終末期」「高齢者」とした結果 14 編、計 153 編（重複 5 編を除く）が抽出された。Google Scholar を用いて、「意思決定」「意思」「代理決定」「家族」「終末期」「高齢者」というキーワードで 7 組の組合せを作り検索した結果、新たに 70 編追加され、計 223 編が抽出された。研究者 2 名の審議によって基準不適合と評価された文献を除いた結果、最終的に 28 編が分析対象に残った。この 28 編を分析した結果は以下の通りであった。①発行年については、最初の文献は 2000 年、認知症高齢者に焦点を絞った文献は 5 編で、その発行年はすべて 2010 年以降であった。②終末期医療の家族による代理決定に伴う問題として、家族が高齢者の本人意思を代弁していない可能性があること、終末期医療の決定を余儀なくされた家族がかなり心理的負担を負っていること、支援する過程で看護師が困難感やジレンマを抱えていることが明らかにされていた。研究成果は、平成 27 年度に学会発表することが確定している。海外発表の文献については、MEDLINE と CINAHL を用いて、「terminal」「decision making」「family」「aged」「Japan」というキーワードで検索した結果、24 編が追加抽出され、研究者 2 名の審議を経て 3 編が分析対象に残った。現在、研究動向を分析中である。

（牧野公美子，白柳聡美，杉澤秀博[1]）[1]桜美林大学

10. 認知症高齢者の終末期医療決定プロセスにおける家族と看護師の相互作用の様相

研究倫理委員会の承認後、研究協力が得られた特別養護老人ホームを通じて代理決定した遺族と、その遺族の代理決定を支援した看護師に対して調査協力を依頼した。本調査では、遺族・看護師双方の同意が得られたペアを分析対象とする。現時点ではペア 5 組の事前同意を得ている。次年度は、特別養護老人ホームとそこで認知症高齢者を看取った調査対象者への協力依頼を継続しながら、遺族・看護師双方の同意が得られたペアに対して半構造化面接調査を順次実施する予定である。（牧野公美子，白柳聡美，杉澤秀博[1]）[1]桜美林大学

11. 一般病院に入院する認知症高齢者への身体拘束に関する看護師の認識変容プロセス

前年度の研修会前後における看護師の認識変化と身体拘束実施数の変化についての質問紙調査の次段階として、面接データについて修正版グラウンデッドセオリーを用いて分析を行った。研修会の何がどのように作用し、個々の看護師の身体拘束への認識をどのように変化させ、チーム間の相

互関係、および身体拘束実施数が減少していくのか、そのプロセスの全容をまとめていく予定である。（倉田貞美）

12. 急性期病院に勤務していた看護師がへき地病院に転任し戸惑いながら地域の看護師としての仕事を理解し獲得していくプロセス

急性期病院からへき地病院に転任した看護師が地域医療にかかわる中で、何を感じ看護に臨む姿勢がどのように変化したかについて半構造面接を実施し、修正版グラウンデッドセオリーを用いて分析した。その結果、看護師は、地域医療に関わる看護師の【驚くほどの生活査定力】に触れ、そこからもたらされる【病院内外との連携で不可欠な情報】が極めて実用的であることを実感し、【急性期病院看護の分業的特質による限界】について振り返っていた。そこから【良好な地域の人と看護師の関係】が地域看護の基盤となることに気づき、自らの＜知ろうとする姿勢への変化＞を自覚してへき地病院における看護師としての仕事に意義を見いだしていくプロセスが明らかになった。研究成果は日本ルーラルナーシング学会第 9 回学術集会で発表した。（三枝智宏，大國護洋子（浜松市国民健康保険佐久間病院），倉田貞美）

13. 急性期病院における身体拘束実施時の看護師の判断に影響する因子

聖隷浜松病院スペシャリストチームとの共同研究として上記表題の研究に取り組んだ。第 1 段階として、ある 1 日の病棟における身体拘束実施の実態調査を行った。その結果、身体拘束実施数は決して少なくなく、何が身体拘束にあたる行為かの認識が病棟、看護師によって異なることが明らかにされた。それは、聖隷浜松病院の「身体拘束に関する指針」「身体拘束運用マニュアル」「身体拘束実施手順」での身体拘束行為としている記載に差があることも影響していると推察された。最終的には、本研究によって、すべての看護師が患者の尊厳を保障した身体拘束が実施できることを目的としている。そこで次年度は第 2 段階に実施予定の「高度急性期病院における身体拘束に関する看護師の認識について」の質問紙調査を準備した。それによって認識の実態・差異の詳細を明らかにして、聖隷浜松病院としての身体拘束への認識の統一を図る予定である。（山本真矢，鈴木千佳代，宗像倫子，中村麻友美，近藤理子，太田美貴（聖隷浜松病院スペシャリストチーム），倉田貞美，牧野公美子，白柳聡美）

14. 母親の清潔なおしゃれ意識とチャイルド・マルトリートメント予防に関する新機軸研究

おしゃれをしたいという気持ちは多くの女性が抱いている気持ちである。しかし、子育て中は自分がおしゃれをするよりも子どもの世話を優先しなければならない場合があり、我慢する必要があり、葛藤がある。そのような母親の気持ちに上手に折り合いをつけるのは子どもとの愛着が鍵となる。1 歳 6 か月児を育てている母親を対象にして静岡県Ａ市において質問票調査を開始し、データ収集、分析中である。（安田孝子、尾島俊之、中村美詠子）

15. 子宮頚部異形成患者の看護実践モデルの構築へむけて

子宮頸がん検診で異常を指摘された患者への看護実践を明らかにするために、看護職への無記名自記式質問紙調査を実施し分析を行った。その結果、約 9 割の看護者が看護の必要性を感じていた

が、実際の援助は不十分だと感じている現状が明らかとなった。そのような状況の中で実際に子宮がん検診にて異常を指摘された経験のある女性に対してインタビューを行い質的に分析していく予定である。（足立智美）

16. 多胎児を妊娠した女性の妊娠継続に関する意思決定過程

引き続きインタビューデータの分析と調査を実施している。（杉山琴美）

17. 65 歳以上の急性前骨髄急性白血病（APL）患者における QOL 評価

高齢 APL 患者の QOL と治療に伴う有害事象との関係を検証することで，患者が QOL を保ちながら治療を受けるために必要な看護方略を検討することを目的に国内多施設で追跡調査を実施している。（杉山琴美，竹下明裕）

18. 進行性脳卒中患者の病の体験の構造

進行性脳卒中の中でも Branch atheromatous disease(BAD)は機能予後が不良な場合が多く、患者の苦悩は非常に大きい。障害と共に生きる価値の変容、自己実現性への支援に対し看護職は大きな課題を担っている。この研究の目的は、食事や排泄の基本的援助場面の語りからその特徴を構造化すること、脳卒中患者の生活の再構築に対する支援への示唆を得ることである。現在データ収集を進めている。引き続きデータ収集、分析を実施予定である。（河島光代）

19. 慢性腰痛患者の痛みに対する認識・態度に関する研究

腰痛を含む痛みは主観的な体験であり、それをどうとらえ、解釈するか、どう向き合うかは個々により、また、人種や民族などによっても異なり、様々な要因に影響を受けている。痛みを体験している患者がそれをどのようにとらえ向き合っているかを明らかにする国際的に使用可能な尺度の作成を目指し、その候補項目を得ることを目的に、日本と米国で慢性腰痛患者にインタビューを実施している。今後分析し尺度開発のための質問紙を作成予定である。

（佐藤直美、佐藤友紀[1]、増井健二[2]、Rob Stanborough[3]）1 常葉大学、2 大阪回生病院、3 University of St. Augustine

## 13　この期間中の特筆すべき業績，新技術の開発

## 14　研究の独創性，国際性，継続性，応用性

## 15　新聞，雑誌等による報道